NPO法人棚田ネットワーク会報誌　第91号

棚田に吹く風

2014
冬
Winter
季　刊

2 新春インタビュー
なぜ旧暦と棚田なのか？
5 フォトエッセイ
棚田ごよみ二十四節気
6 棚田・里山からのたより
棚田保全への取り組み
～中条棚田オーナー制度と棚田百選～
長野県長野市中条
8 棚ガール
棚田⇄温泉案内所
9 棚田博士は今日も行く
棚田の誕生を想起させる金山棚田
岩手県一関市舞川字唐ノ子
12 会員のひろば
14 イベントレポート
エコプロダクツ展2013
『旧暦のリズムで棚田を感じる』
15 Project Report

新春インタビュー

なぜ旧暦と棚田なのか？

写真家 青柳 健二 × 棚田ネットワーク（編集部）

「旧暦棚田ごよみ」の写真を担当する青柳健二さんと編集部スタッフで、平成 26 年版の卯月に掲載された御殿場市古沢地区の富士山の見える棚田を訪れ、「旧暦と棚田」をテーマにお話をお聞きしました。

編集部（以下、編集）
新春インタビューといっても、今日は1月7日なので、旧暦では師走の7日ですね。新年まだ1ヶ月あります。

青柳健二（以下、青柳）
では新年直前インタビューということで（笑）。

編集
今日は曇りがちな中、見事な富士山が現れました。

青柳
ほんと富士山が見えて良かったですね。平成26年版の卯月に載せた富士山も3日間はりこんで、撮れたのは数シーンだけです。富士山は本当にタイミングが難しいのです。この旧暦プロジェクトの行いがいいのではないでしょうか（笑）。

富士山は自然暦

編集
平成26年版は、表紙にも山梨県南アルプス市の富士山を掲載しました。昨年は富士山がユネスコの世界文化遺産にも登録された中、青柳さんも積極的に富士山の見える棚田を撮影していますね。

青柳
もちろん、富士山とタイアップすることで棚田の注目度をあげたいという思いもありますが、ちょっと反発もあったのです。富士山が世界の遺産になったのが、すごく仰々しく感じたのです。確かに聖なる山ではあるのですけど、農家の方にとっては近所の山で、春になれば雪形が見える自然の暦でもあったわけです。ですので、日本人にとってはもっと身近な存在であることを、棚田と結びつけることで表現したかったというのもあります。

編集
確かに日本人にとって富士山は季節の移り変わりの象徴でもあり、時計でもありますね。そういう意味では、富士山と旧暦と棚田は相性がいいのかもしれません。

青柳
富士山を自然暦と考えれば、大陰暦も自然と接していて生まれたものですから、旧暦ととても近いところにあるのです。農家の方にとっては欠かせない棚田から見える富士山というのは世界遺産に匹敵する価値があるのではないか。暦というキーワードを持って来ると、富士山と棚田の関係がよく見えてくると思います。

編集
棚田から富士山を見て、富士

山から暦をみて、暦から棚田を見ることによって、表面的なことではなくて、そこに繋がっている見えない糸を見出すのは、まさに旧暦棚田プロジェクトの真髄ですね。

青柳　それこそ富士山は自然遺産ではなく、文化遺産として登録されたので、大切なのは人との関わりです。でもそこには農業の視点は欠落していますよね。そこを補うのが、棚田に関わる人の役目かもしれません。

今、旧暦が注目される理由

編集　富士山もそうですが、今、期せずして「旧暦」や「棚田」も注目されていますよね。そういうのは偶然じゃなくて、明治維新の１００年の呪縛が解かれつつあるのか、急激な近代化の中で押さえ付けられてきたものが、ふつふつと湧き出る時代なのでしょうか？

青柳　若い人たちは、もう二世代ぐらい変わっているじゃないですか。「旧暦」というと古い暦という感じがしますが、もしかしたら若い人たちには逆に新鮮なのじゃないでしょうか。しかも日本は、中国やベトナム、韓国が太陰太陽暦をいまだに使っているのに比べれば、完璧にやめてしまった国ですので、とてもめずらしく感じるのでしょうね。

編集　今は、逆に古いことを知っている方が、先端という感じになりつつありますね。

青柳　古いといっても、日本人が太陰太陽暦を使い始めて千何百年経っているじゃないですか。そうすると明治５年から現在までと比べれば当然、旧暦を使っていた時間の方が長いわけです。それがまだ染みこんでいるというか、明治維新でガラッと変えようとしたけど、それは表面的なところで、日本人の心の中では、千何百年の蓄積されたものが、完全には消えてないのではないでしょうか。

編集　身体がリズムとして覚えているものが旧暦といえるのかもしれませんね。

旧暦も棚田もめんどくさい

青柳　旧暦というと二十四節気や七十二候をイメージするじゃないですか。でも考えてみると、これは月の運行とは関係ありません。では最初から太陽暦を使っていたら、こういうものが生まれたかというと、太陽暦では１月１日は、だいたい１月１日なので、わざわざ季節名をつける必要がないのです。逆にいうと太陰暦だと季節がずれて行くので、農業をやっている人たちにとっては、季節を何とか合わせるのが死活問題だったのです。

編集　旧暦は、折衷案みたいなものですね。

青柳　だから旧暦でないと、二十四節気や七十二候は生まれて来ないので、それは実際には太陽暦かもしれませんが、旧暦の象徴として正しいわけです。ともあれ太陽暦を最初に発見するには、そうとう科学的に一年の太陽の動きを観察しないとわからないですよね。そうすると、最初は実際に目に見える月を観察する方が簡単ですので、旧暦はより身近で経験的に発展してきた暦なのではないでしょうか。

編集　そういえば西洋のグレゴリオ暦に代表される太陽暦は、どこか合理的に感じます。旧暦は、太陰暦をベースに、それを調整するように二十四節気や七十二候が生まれたといいますが、それも何度も改暦を重ねながら、徐々に継ぎ足しながら複雑に発展してきて今の旧暦になったという感じですね。確かに合理性というよりは、経験の積み重ねによって成り立ってきた暦ですね。そして棚田も、いきなり合理的な区画を計画してできたのではなく、山の地形に合わせて直感的に作って、少しずつ継ぎ足しながらいつの間にか出来上がっちゃったみたいな感覚が、とても旧暦の成り立ちと似ているような気がします。

青柳　やっぱり根っこにあるものが同じで、要するにめんどうくさいですよ（笑）。なんでこんな複雑な暦を使うのかなって思うのだけど、それは太陽暦を知っ

ている今だからこそ言えることで、棚田も同じで、真四角に広くした方がいいというのはあとになってわかることですよね。当時旧暦や棚田を使っていた人は、自然とそうなっただけだと思います。旧暦も棚田も、そうやって昔から続けてきて、棚田は辛うじて残っているけど、旧暦だけスポッと廃止された。でも考えてみれば、旧暦は農業とは切り離せないものですよね。

編集　確かにめんどうくさいですよね（笑）。というか、合理的な精神で理解しようとしてもわからないですよね。棚田も合理的な精神で理解しようとしたら、なんでこんなめんどうくさいところでお米作るのかって。でもそこには、季節や地形という自然の生きた知恵の蓄積がある。それを非合理だからといって廃止していいのかということを、「旧暦」と「棚田」を結ぶことによってより明確なメッセージになるのですね。

自然との協調の中に生まれた文化

編集　棚田を見ると「安心感」とか「心がホッとする」とか、いくらでも平易な表現はできるのですが、そこには自然との協調というか、自然に対する罪悪感のなさというか、自然と共に作ってきたというところで、人間が根源的に安心するのではないでしょうか。

青柳　うしろめたさがないのでしょうね。ここまでなら許してもらえるかな、みたいな（笑）。

編集　自然との折り合いみたいなものでしょうか。

青柳　幕末とか明治に西洋人がいっぱい来ていましたよね。その時、日本人の農民に宣教師が「人間は神がつくった最高のもので、自然や動物は自分たちが支配するものだ」と言ったら、農民たちは「なんで人間がそんなに偉いんですか?」と聞いたという話があります。また日本にいる犬とか馬とか家畜が、すごく甘やかされていると文句を言ったそうです。要するに西洋人にとっては、自然や動物は管理して、支配して、自分が一歩上から見るものらしいのですが、それを日本人に説いてもわからなかったというのはとても象徴的な話だなって。そういうことって、絶対に「旧暦」とか「棚田」にも通じるのではないかと思います。日本人にとっては人間が一番偉いわけじゃないのでしょう。数年前に宮崎で口蹄疫の問題で、大量に牛が死んだ牧場主が慰霊碑を建てたと聞きましたが、こんなことは外国であるのでしょうかね。

編集　この前、高野山に行った時に、シロアリ駆除の会社が建てたシロアリの慰霊碑がありました（笑）。

青柳　稲作にしても、アメリカやオーストラリアなどはたくさん作っているけど、稲作文化はあるのかなと疑問に思います。アジア人にとって穀物というのは、単なる生産物以上のものがあるのではないかと。例えばアメリカ人やオーストラリア人にとっては、作物を多量に作って売って金になればハッピーなわけじゃないですか。そこに祭り事をするとかはないような気がします。

これからの「旧暦棚田プロジェクト」

編集　今回で2年目の「旧暦棚田ごよみ」になりましたが、これからの展望などをお聞かせください。

青柳　このプロジェクトに関わって「旧暦」のことをよくよく調べて見ると、それまで意識していませんでしたが、これほど人々のライフスタイルと深く関わるものはほかにないんだなと感じました。暦を制する者は世界を制するというように、昔は許可を与えられた人しか暦を作れなかったのがなんとなくわかります。勝手に作ったら重罪だったのです。いま僕たちは勝手に作っていますが…。

編集　世が世なら、私たちはみんな死罪ですね（笑）。

青柳　ありがたいことに今は死罪にならないので、来年ももちろん続けたいと思います。これからやりたいことは、棚田の七十二候を募集して、「棚田ごよみ」ならではの七十二候を作りたいですね。

編集　それは面白いですね。来年以降もぜひよろしくお願いします。

棚田ごよみ 二十四節気

写真・文 青柳 健二

大寒 だいかん

旧暦十二月廿日(新暦一月二十日)が、二十四節気第24番目の「大寒」。寒さが一番厳しい時期だ。でもあまり暗さを感じないのは、次に「立春」を控えているからだろうか。寒さも極まれば、あとはだんだん暖かくなるだけ。その春への期待も込められているからかもしれない。この時期の棚田は雪に覆われていた。長靴の底から冷たさが伝わってくるのは防ぎようがないが、凛とした空気に身が引き締まる。純白の風景の中で、カーブを描きながら点々と続いている小動物の足跡が、いっそう風景の静かさを感じさせる。かじかむ手でシャッターを押した。

山形県
朝日町の棚田
椹平(上)／最上川河畔(下)

青柳 健二 Profile

1958年、山形県河北町生まれ。山形大学工学部卒業。日本を含むアジア各地の稲作文化、とくに棚田とそこに暮らす人々を撮影し、新聞、雑誌、写真展で発表。主な著書は『日本の棚田百選』(小学館)、『棚田を歩けば』(福音館書店)、『花咲(わら)う』(廣済堂出版)など。2012年には棚田ネットワークの旧暦棚田ごよみ製作に全面協力。
http://www.aoyagikenji.com

上・下左：大西の棚田／下中：栃倉の棚田／下右：田沢沖の棚田

棚田保全への取り組み
～中条棚田オーナー制度と棚田百選～

長野県長野市中条

中条村から長野市中条に

長野市中条地区は長野市西部に位置しており、中条のシンボルであり信州百名山の一つでもある虫倉山（標高1378メートル）には子育ての神様として山姥伝説が古くから伝承されています。

傾斜地が大半となる山間部で、古くは養蚕業などを生業としていた上水内郡中条村は、平成22年1月に隣接していた長野市と合併しました。過疎化と高齢化が進むなか、茅葺屋根の古民家を移築した宿泊施設「やきもち家」では、囲炉裏を囲んでの食事など昔ながらの田舎暮らしが体験でき、「道の駅中条」では地元の特産品や穫れたて新鮮野菜などを手に入れることができます。また両施設では、中条地区の郷土食である「おぶっこ（味噌煮込みうどん）」「灰やきおやき」を食べることができるなど、古くからの中条の暮らしは今でも随所に息づいています。

中条村田んぼの会設立

平成8年に、棚田の保全と地域の活性化を目的に地元有志が集まり「中条村田んぼの会（以下、田んぼの会）」が発足し、この会が中心となって棚田オーナー制度を始めました。田んぼの会では、棚田オーナー制度の受け入れや東京の私立高校の修学旅行の受け入れ、各種イベントへの参加など活性化のために積極的に活動してきました。

長野市中条地区における「棚田百選」

中条地区には美しい棚田があちらこちらにありますが、平成11年に「栃倉」「大西」「田沢沖」の3箇所が、地域活性化に取り組んでいることを基準とされた日本の棚田百選に選定されました。うち「栃倉」「大西」の2箇所では棚田オーナー制度が実施され、「田沢沖」で

も複数の農家が棚田の保全に努めており、選定から15年が経つ今でもその美しさが保たれています。

中条田んぼの会による棚田オーナー制度

都市と農村の交流の場を持つことを目的として始まった棚田オーナー制度の活動では、東京・千葉・埼玉など県外を中心とする大勢のオーナーの参加を得て、田んぼの会の指導のもと米作りをしています。

参加者みんなで楽しみながら泥だらけになり行う田植え作業。黄金に実った稲穂を見ながらの稲刈り作業。都会の喧騒を離れ大自然のなかで土にまみれての作業で得られるものは計り知れないことでしょう。現在は、田植え及び稲刈りの作業をオーナーのみなさんと実施していますが、この頃は、田耕しや畔の草刈りなども体験したいと声が上がっています。今後は、いっしょに行える機会がもてるように考えています。

田んぼの会とオーナーのみなさんの大事な楽しみの一つは、「お茶こ」と呼ばれる作業途中の一休み休憩です。地元のお母さんたちのそれぞれの「家の味自慢」である郷土料理がずらりとビニールシートの上に並び、受け入れ側とオーナーのみなさんの交流の輪が広がりあちらこちらで笑い声が響き渡るその光景は、田んぼの会が発足当時から強く願う「遠くの親戚を作る」ことそのものなのです。

田んぼの会のメンバーは皆80歳を超えました。2年後には会発足から20年となります。生まれ育った故郷の美しい棚田の景観を「ふるさとの原風景」として大切に守り続けるために、田んぼの会と後継者とを育てていくべく、今日も棚田の手入れに励んでいます。

中条田んぼの会

上：オーナーの田植え／中：稲刈り／
下：稲刈り中の一休み「お茶こ」

左：会長の小林さん夫妻／右：
水路の水は涸れることがない

■ 棚田へのアクセス

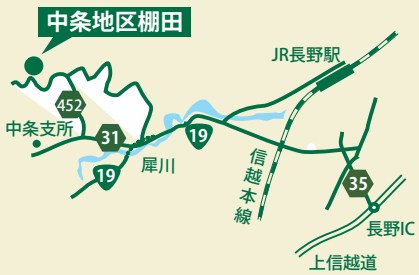
【公共交通】JR長野駅よりタクシー利用により中条地区太田まで約40分

【自 動 車】上信越道の長野ICより県道35号、国道19号、県道31号、県道452号線経由で中条地区太田まで約26km。所要時間約40分

■ お問い合わせ

中条田んぼの会　会長　小林薫一（しげひと）
Tel.026-268-3300

長野県・長野市



棚ガール Tana Girl

Vol.6

棚田の虜になった乙女、通称「棚ガール」
そんな女性を紹介するコーナーです!!

新潟県佐渡市
地域おこし協力隊
新田 聡子（26歳）

東京にいる時から何度も通った憧れの島。

今まで国内外色々な場所に通いました。どの場所にも思い入れがあります。でも、その中でも佐渡は特別。力強く吹く風、自然の移ろい、たくさんの業をもつ人、芸能や祭り。知れば知るほど、“好き”が増えていきました。3年間通って、やっぱりここが好き。ここで暮らしたいと思いました。

2013年4月、岩首集落に移住。集落の真ん中に位置する空き家の横を朝早くから軽トラがたくさん通ります。

春になって雪が解けた山に登ってみると、そこには田圃や畑が広がっていました。風が吹くと木々が揺れたり、竹同士が当たってカランコロンと音がします。作業中の集落の人たちとお喋りしながら、まだまだ続く棚田を登っていきます。見晴らしの良い場所まで登ってきて感じた心地良さは今も忘れられません。海を見下ろしながら山いっぱいに広がる田圃をずっと見ていました。

もうすぐ岩首集落で暮らし始めて1年、ここでの暮らしは全て繋がっていると感じます。沢山“好き”が増えました。ここで暮らしていくために、安全で美味しいものを食べるために、祭りで鬼太鼓をみるために、みんなが元気に過ごしていくために、岩首集落の一人としてこれからもここで元気いっぱいに過ごして行きます。元気の源、自分にとって大切にしたいものは何かを教えてくれる場所に出会えた事、暮らしを築き上げてきた先人達に感謝する毎日です。

棚田↑↓温泉案内所

全国のベスト・カップルな棚田と温泉をご紹介！

第三回 折角、信州の稲倉棚田に行くのだから

信州東御市・日帰り温泉『湯楽里館』☎0268-63-4126 http://www.tomi-kosya.com/yurarikan.html

風光明媚な信州上田市。真田家ゆかりの地であり観光要素に事欠かないのだが、その中でも「温泉」を外すわけにはいかない。

棚田オーナー制度で参加させてもらっている田植えと稲刈りは5月と10月。ともに穏やかな陽気で最高にきれいな季節であることはもちろん、5月は山菜が美味しいし、10月はなんと言っても新蕎麦が楽しめる。それに汗をかいた後の温泉が最高に気持ちいい陽気。

上田から最寄りの温泉地では鹿教湯温泉が有名だが、スケジュール的に日帰りが出来るように、もっと近場の温泉に行くのが恒例行事となっている。

その名は「湯楽里館」

稲倉棚田より4㌔程の場所、同じ山の中腹にある施設で、露天風呂から東御の街並を眼下に美しい北アルプスの山々を一望でき、弱アルカリ単純泉の優しいお湯は農作業で疲れた体を癒し、東京まで運転するためのパワー充電に欠かせないものとなった。

施設には地元で穫れた農産物の販売や地ビールの提供もあり、温泉有りの道の駅といった風情である。

棚田をきっかけに地元への愛着がわいてくる。インターネットで明日の天気を調べる際も何となく上田市も確認するのは、やはり一時の観光とは異なる深い想いが育まれ始めている事だとあらためて感じた。

棚田ネットワーク 玉崎 修平

棚田博士は今日も行く！

中島峰広の全国棚田行脚

棚田の誕生を想起させる金山棚田

岩手県一関市舞川字唐ノ子

一関市は、県の南部磐井・千厩丘陵によって占められ、わが国における棚田卓越地の一つにあげられる。舞川字唐ノ子は、旧一関市の東部、ひときわ目立つ小富士と呼びたくなるような山容の烏兎ヶ森（標高350メートル）の北2キロにある小集落。北上川に流入する番台川の小支流沿いにあり、その最上流部の一軒家、金山さんが所有する谷地田が金山棚田である。その存在について棚田ネットワークの会員小岩浩一さんが情報を寄せて下さった。パンフレットなどで、所有者の名前を冠して紹介される棚田は私が知る限り他に例がなく、唯一の事例ではないだろうか。

小さな川沿いの谷地田 バス停近くに案内板も

2013年6月下旬、小岩さんの招きで金山棚田を訪ねた。現地へは、一ノ関駅から岩手県交通バスの摺沢行きが1日7便運行されており、土樋で下車すればよい。バス路線は病院に寄るため迂回するが、最短のルートは、一ノ関駅西口から西へ直進、上ノ橋を渡り青葉一丁目の交差点を右折、旧国道4号を北上する。山目町の交差点を右折して県道14号へ市街地を抜けると、広い平坦な水田地帯に出る。ここは、狐禅寺の狭窄部によって北上川が堰上げられ、その氾濫による被害を蒙ってきた一関市の遊水地的な役割を持つところである。

北上川に架かる柵ノ瀬橋を渡り、標高20メートルの平坦地から150～300メートルの丘陵地へと上って行く。水無沢の県道14号と261号が分岐する交差点を261号へと向かえば、やがて土樋のバス停がある。バス停を過ぎるとすぐに、集落へ入る道があり、左折する角に金山棚田の案内板が立っている。案内板に従い、さらに奥へ坂道を上ると谷幅70～100メートルの谷地田が現れる。その最上流部、金山家の前後5分の1の斜面に、国土地理院発行2万5千分の1地形図にも示されている広さ7アールの個人用溜池を持つ金山棚田が姿をみせる。

中島 峰広（棚田博士）

早稲田大学名誉教授。学術博士。NPO法人棚田ネットワーク代表。全国棚田（千枚田）連絡協議会理事、棚田サミット開催地選定委員会委員長。1933年宮崎県生まれ。早稲田大学教育学部地歴科卒。2004年まで早稲田大学教育学部教授。著書に『日本の棚田―保全への取組み』『百選の棚田を歩く』『続・百選の棚田を歩く』『棚田 その守り人』（以上、古今書院）。現在、百選外の棚田についての執筆準備のため全国行脚中。

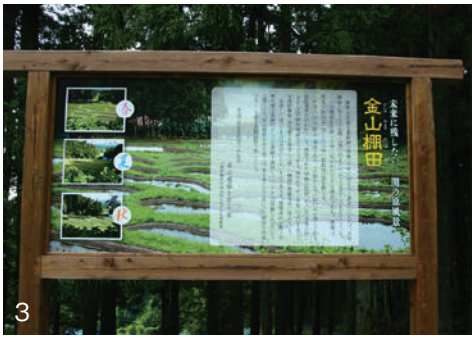
人力で造成できる規模 棚田の起源を連想

棚田は、パンフによれば江戸時代後期の開発といわれ、面積は42アールの小規模なものだ。

しかし、家より上に約70枚、下に約30枚の小さな区画の百枚田を形成、展望台から見ると3～4列になり、一枚一枚が鱗片状に並び見事な景観を作り出している。小さなものは長さ2トル、幅1トル前後、大きなものでも長さが10トル前後、幅3トルほど。形状は等高線型、畦は優しい曲線を描き、法面が50センほどの高さしかないので、畦と法面の区別がつかない感じがする。この曲線に平行して30センの間隔でイネが丁寧に植えられているので、棚田全体が一段と美しくみえる。その大きさは、人が機械類を用いず自らの力のみで棚田を拓く時、無理のない小さな土工量で拓ける広さ、つまりヒューマンスケールの広さなのだ。ここでは、畝町直しも行われず、耕耘機と伝統的な農具によってのみ耕作が続けられてきたため、最初に棚田が拓かれた時の姿がそのまま残されているのである。

所有者の金山孝喜さんは75歳、奥さん73歳、市内の建設会社に勤める長男45歳、その嫁33歳、孫1歳の5人家族。中学卒業後、地元の東北開発の関連会社に就職、会社が倒産するまでの7年間、石灰岩を覆う土を取り除く作業に従事した。その後22歳になって東京方面へ出稼ぎに行くようになり、専ら下水道工事を行う建設会社で働き、両親が健在な時でも春と秋の農繁期には帰郷して農作業を手伝う生活を続けた。

34歳の時に父親が脳卒中で倒れてからは、農作業を全面的に担うことになり、正月半月、お盆1週間の骨休みで帰るほか、春は田作りから田植えまで行う1か月間、秋は稲刈りから収穫後の乾燥・脱穀、荒起こしまで行う1か月間、農作業を行うため帰郷するという生活が始まった。こうした生活が70歳まで続けられ、畝町直しをして大型の機械類を使用することもなく、伝統的な手法で棚田が維持されてきたことは驚くべきことである。



1：金山棚田へ続く道／2：紫陽花に彩られる棚田。紫陽花は金山さんが植えたもの／3：モデル事業で作られた看板／4：棚田の上にある小さな溜め池

イブリ押しやササラが今も活躍する田んぼ

現在は水田45アール、100枚のうち休耕田30枚を除く70枚を耕耘機と3本鍬、4本鍬、平鍬を用い奥さんと2人で耕作する農業専従者である。その農事暦を述べると、春は田に水を引いた後、3本鍬で畦をつけ、平鍬で畦を塗る。その後耕耘機で耕起するが、耕耘機が使えない角は4本鍬で起こす。耕耘機が普及する前は4本鍬を使い荒起こしをする一番ブチ、それを砕土する二番ブチとよばれる作業を行っていたそうだ。この作業と同時にイブリ押しという作業、野球場で使うトンボのような道具を用い奥さんが均していく。その後、6本歯のササラで筋をつけ、1週間かけて2人で筋に沿ってイネを手植えする。そして春から秋までの間に1人で5回ほど草刈機によって草を刈るが、1回につき5日はかかるそうだ。秋は、1週間かけて2人で稲を手刈りしてハセ掛け（ハサ掛け）にする。ハセ掛けは2週間から1か月行うこともあるという。この後、来季のために耕耘機で耕起し1年間の作業が終わることになる。

用水源となる溜池は、現在一面スイレンで覆われているが、水は浮草類の腐食により黒く濁っていた。金山さんが子供の頃は澄んだ綺麗な水でむらの子どもたちと一緒に泳いだそうだ。堤の角には鉄パイプの樋があり、雨不足のせいか、梅雨時というのに7つの樋のうち5つは木の止水栓がむきだしになっていた。

4年前に始めて知り守る会を結成

守る会の事務局長小岩さんは57歳、家族はNECに勤める54歳の奥さんと母親78歳の3人。小岩さん自身も中学卒業と同時にNECに入社、定時制高校に通学しながら勤務、品質管理に携わり、中国、台湾、フィリピン、タイなどにも出張したベテラン社員だった。しかし、10年前から1500名の従業員が300名に縮小されるというリストラが始まり、早期退職した。現在は所有する水田70アール、畑40アールの一部を利用、母親と2人でカボチャ、アスパラ、タマネギ、ナガネギなどの野菜類や仏花アスターを栽培、産直市場に出荷する農業専従者であり、農協の理事も務めている。

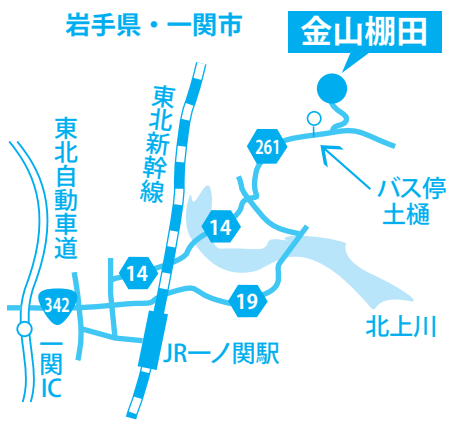
小岩さんの家は、金山棚田のある舞川唐ノ子とは小山で隔てられた舞川峠、直線距離にすればわずか700メートルしか離れていない。しかし、金山棚田が県道から1キロほど入った集落の最奥部にあるため、小岩さんは4年前までその存在を知らなかった。知るきっかけは、舞川18区の農家組合長の在任中、釣り人が無断で溜池に放流したブラックバスの駆除作業を仲間に誘われた時である。金山棚田を初めて見て、拓かれたままの棚田が残っていることに驚き、その美しさを守ってきた人の労苦に敬服するとともに、労働記念碑を見る思いがして感動したそうだ。

その感動から、自らが旗振り役として事務局長になり、舞川各区の区長、農家組合長、中山間地域等直接支払の代表などに呼びかけ、金山棚田を守る会を立ち上げた。現在、会のメンバーは17名、2012年に一関市農村地域活性化モデル事業に採択され、5年間の活動に120万円が支給されることになった。初年度は計画策定で終わったが、2年目の2013年、棚田へのアクセス路となる道路の整備を行い、情報発信に力を入れた結果、地元紙が取材に訪れ紙上で紹介するなどして、各方面に知られるところとなったのである。

事業計画の残りの3年間、後期高齢者となった所有者の金山さんを支えながら、現在の姿を後世に伝えるにはいかなる保全を図ればよいか、具体的な施策を展開していかなければならないと、事務局長としての責任を述べられた。

上：所有者の金山さん（左）と筆者／下：広報担当の小野寺さん（左）と事務局長の小岩さん（右）

金山棚田へのアクセス



【公共交通】JR一ノ関駅前より岩手県交通の摺沢駅行きのバスに乗車、約30分の土樋で下車。更に少し進むと左手に「金山棚田入り口」の看板あり。ここから棚田まで900m徒歩20分。

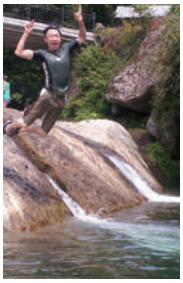
【自 動 車】東北自動車道「一関IC」下車、国道342号、県道14号、県道261号線経由で棚田まで12ｋｍ約20分。

会員のひろば

会員の声

地域へ～震災が背中を押してくれた

山形県山形市
梶村 勢至



左：沢遊び
右：後列左から二番目が僕

今は昔、以前「棚田に吹く風」のコラムを書いたのはもう10年以上前のことです。20代前半の当時は熊野（和歌山県田辺市本宮町）の温泉旅館に勤めており、自分に何ができるのかを模索している時代でした。

その後、農業フリーターとなって各地を転々としたり東京でサラリーマンを経験したりと紆余曲折があって、ようやく2013年5月に山形に移住してきました。

農家研修を繰り返した農大時代、熊野時代、そして農業フリーター時代と多くの農家さんのお世話になりました。いつかは地域に入りたいとの想いがあり、どこに自分の場所があるのかを探しているような20代でしたが、そうして頂いた農家さんとのご縁のなかで話をすると、どこも同じような課題を抱えていることが分かってきます。そんな課題を一緒に解決できれば多くの人と達成感を共有し喜び合える、そう思うようになるのに時間はかかりませんでした。ただし、ではどうやって、というところにはなかなか辿り着けず、現場に飛び込むこともできず暫く悶々とする季節を過ごしました。

「いつかは地域に入りたい」という想いをなだめながら会社勤めをすること5年弱、「いつかはと思ってるだけでは“いつか”は“いつか”のまま。いま動かなければもう動けないかもしれない」と覚悟を決めつつあった頃、あの大震災が発生しました。そうしてようやく自分の想いに素直になることができました。

それから2年少々かけて、地域に出て行くための準備をしました。NPOのプログラムに参加するなどして、それぞれの地域で町おこし等で活躍されている方々に学び、またご縁を繋げていただきました。ここで培った人との繋がりは僕の大切な財産です。ひょっとしたら震災がなかったら繋がらなかったご縁ばかりのような気がします。皆それぞれ震災からなにかを受け取っていて、それでこうして繋がったのだと思っています。

地縁血縁のなにひとつない山形への移住も、人とのご縁で決めました。土地に惚れるより前に、この人達と一緒なら成功するだろうと。もちろんそれまでにも色んな所で有り難いご縁をいただいていましたが、山形になったのはそういうタイミングだったからだとしか思えません。

山形では、地域活性のコーディネーターとして活動できるよう試行錯誤をしているところです。これまでにご縁を頂いた方に助けてもらいながら、地域課題に向き合い、作り手達とともに喜びや苦労を分かち合う関係を築いて参ります。

※ www.tenite.jp で活動の一端をご覧いただけます。

会員レポート

飛行機で見た棚田描写が美しい中国映画

インドネシア・スマラン在住　大久保 芳洋

飛行機の中で、中国貴州省の、トン族が主役の映画『童年的稻田』La rizière（2010）を見ました。トン族とは、特徴的な木造伝統建築（鐘楼、風雨橋）で有名な少数民族。ここは、（新潟・松之山のように）山深く平らな土地が殆どなく、徒歩でしか辿り着けない山間の集落に緻密な棚田が広がっています。伝統文化と都市化の間で揺れ動く世代を描いた、よくあるような映画かもしれませんが、トン族集落と棚田の描写が美しくて楽しめました。

ハサかけ乾燥をせず、米粒の状態で地面のシートに広げて乾燥させています。なぜかと思ったら、棚田での収穫時に稲穂を箱に叩きつけてその場で脱穀していました。箱に入った米粒だけ持って帰ればいいので、遠い棚田から重い稲穂を担ぎ下ろさなくてよい訳ですが、稲刈りをしつつ、穂を振り上げては下ろす脱穀作業も重労働に見えました。稲わらは、わらぼっちにして棚田に残していました。急斜面の小さな棚田なのに、両手で掴みきれないほどの大きな魚がいて、貴重なタンパク源になっているようです。土地の肥沃さを感じさせられます。

私は現地を旅行したことがあるため、この映画を当時を思い出しなおさら楽しめたのですが、数年のうちに急速に都市化しており変化の時代を迎えている貴州省の集落が、これからどうなっていくかが気がかりになり、映画の登場人物と一緒になって悩ましい気持ちになるのでした。

※この映画は、日本では上映、またはDVDなどでの販売はされていないようです。そのような動きがありましたら、また改めてムービーコーナーでご紹介させていただきます。

会員の声募集！

「こんな活動をしています」「こんなことやります」という皆さんの声を編集部までお寄せください！ ご要望、感想やご質問でもOK！（会員の声800字まで、会員レポート400字まで。写真も添えて）

〒一六〇－〇〇二三 東京都新宿区西新宿七－一八－一六
トーシンハイム七〇四号「棚田に吹く風 会員のひろば」宛
メールでも受付けています ⇩ hiroba@tanada.or.jp

棚田散歩

和歌山県有田川町 あらぎ島の棚田

和歌山県有田川町で開催された棚田サミットに参加した。

現地見学会は、有田川沿いにバスで約一時間さかのぼった清水地区で行われた。当日は天候にも恵まれ、道の駅でバスを降り、そこから散策を始める。コースは集落を山の方に向かって登り始め、じきに棚田が現れ、三田の棚田とのこと。一見どこにでもある棚田ではあるが、集落と一体となり、ブドウ山椒の畑や住宅の周りにはナンテンの木がそこここに植えてあり、のどかな景観を楽しむ。一方、獣害対策の電気柵が至る所に張りめぐらされ、生活の厳しさの一端をのぞかせている。急な農道を上っていくと集落の一番上に神社があり、そこから集落全体を見渡すことができる。少し休憩し、登りで乱れた呼吸を整えてから下っていくと、やがて対岸に扇型のあらぎ島の棚田が見えてくる。わずか二・四ヘクタールの棚田ではあるが、その特徴ある形は存在感を放っている。

この棚田は、江戸時代の初期に上流から用水路を引き拓かれたとのことだが、用水を均等に配水する工夫からできた形状だと思うが、まるで上から眺められることを意識して創ったかのような造形美に驚かされる。今年十月に、棚田ばかりでなく周辺の山林、集落まで含めて一体として、「あらぎ島及び三田・清水の農山村景観」として重要文化的景観に選定されたという。地元の方の自慢げな説明を聞き、この豊かな恵みを確実に受け継いでいけるだろうとの感を強くして、みかんを土産に帰路に着いた。

（茨城県取手市　杉山行男）

編集部イチオシ! BOOK & MOVIE

BOOK

里山資本主義
――日本経済は「安心の原理」で動く

藻谷 浩介・NHK広島取材班（著）

¥820（税込）
角川書店
2013年7月

里山資本主義とは、日本に今活用されていない休眠資産を再利用することで、原価0円からの経済再生、コミュニティ復活を果たしていこうという考え方。エネルギーやモノを地域の外から「買う」ことで成り立って来た経済のシステム。ここに矛盾が生じている昨今、すぐそばにある資産を発掘・活用しながら地域単位で経済を自立させるバックアップシステムを構築することが急務であると説く。実践者の具体例などを提示しながら、今後、私たちが選択するべき道へのヒントを与えてくれる本。

MOVIE

『祝の島』（ほうりのしま）

纐纈あや初監督作品／2010／日本／現在も上映中（各所によりスケジュールは異なる）

巨大な岩で作られた棚田が登場する映画『祝の島』。舞台は瀬戸内海に浮かぶ山口県上関町祝島。人口僅か500人のこの島で1982年、島の対岸4キロに原子力発電所の建設計画が持ち上がる。「海と山さえあれば生きていける。だからわしらの代で海は売れん」という祝島の人々は、以来現在に至るまで反対をし続けている。1000年先の未来が今の暮らしの続きにあると思うとき、私たちは何を選ぶのか。祝島の未来にいのちをつなぐ暮らしを描くドキュメンタリー。

イベントレポート
Event Report

恒例のエコプロダクツ展に棚田保全６団体で共同出展しました

日本最大級の環境展示会 第15回 エコプロダクツ2013

共同出展した棚田保全団体

- NPO 法人恵那市坂折棚田保存会（岐阜県恵那市）
- NPO 法人大山千枚田保存会（千葉県鴨川市）
- NPO 法人十日町市地域おこし実行委員会（新潟県十日町市）
- 佐渡棚田協議会（新潟県佐渡市）
- 奥能登棚田ネットワーク協議会（石川県珠洲市）

毎年12月に東京ビッグサイトで行われるエコプロダクツ展。2013年は12月12日から14日までの三日間でした。前回に続き棚田保全６団体がグループとして隣り合って出展。棚田米の試食、旧暦棚田ごよみや地域産品の販売、トウキョウサンショウウオの展示などで、棚田地域の多様な魅力をＰＲしました。初日の夜は懇親会もあり、交流を深めました。

イベントレポート
Event Report

『旧暦棚田ごよみ』青柳健二さんスライドショー＆棚田米の試食会開催

11月14日（木）、「旧暦棚田ごよみ」の紹介イベントとして、丸の内さえずり館で写真家・青柳健二さんをお迎えしてスライドショー『旧暦のリズムで棚田を味わう』を開催しました。募集30名に対し43名もの参加者でにぎわい、旧暦の二十四節気の解説に合わせて紹介される美しい棚田を堪能しました。新米の試食は岡山県北庄棚田米と栃木県岩ノ作棚田米。どちらも大好評でした。

Project Report
プロジェクトレポート

栃木県茂木町
茂木プロジェクト

岩の作棚田のいま

昨年の体験田植えで1株に1本、2本、3本ずつ植えた稲株は猛暑にも負けず順調に育ちました。会員7人の協力を得て「穂数・粒数調査」の結果も出そろいました。結果は平均で1、2、3本植えの順に、穂数が10.9、13.9、14.3本、1穂粒数が116.4、104.7、101.6粒、1株総粒数は1269、1453、1460粒でした。「一粒の種籾が千粒の米になる」ということを実感できました。2人の会員から、「籾を数えていると、内部に米が稔っていない空籾があることに気付いた。これは差し引かなければ?」という指摘がありました。2人の調査によると、その率は5%程度です。的を射た指摘、嬉しく、頼もしく受け取りました。次回から、もう一段レベルを上げた調査を考えましょう。写真は暮れの早坂棚田（岩の作棚田の隣）です。連日の厳しい冷え込みで、田んぼの表面は凍てつき、日陰の霜柱は足首までの高さでした。岩の作棚田の春は2月のニホンアカガエルの恋の歌から始まります。とても美声です。今年も岩の作棚田で遊びましょう。2014年がいい年でありますように･･･。

（安井 一臣）

岐阜県恵那市
棚田ビオトープ プロジェクト

雨の稲刈り

2013年の稲刈りは雨。ほんとうなら「田植えは雨の日でも、稲刈りは雨の日はダメ」なのですが、10月9日（水）に岐阜県立国際園芸アカデミーの学生9名と稲刈りをしました。カッパを着ていましたが、さすがに体温が低下、坂折棚田のお茶番処にて暖かい緑茶の「おもてなし」（流行語）を受けました。ちなみに、午後から晴れとなりました。

坂折棚田で棚田（千枚田）サミットが2003年に開催されて10年。「第9回全国棚田サミット10周年記念シンポジウム」が10月26日（土）に開催され、中島峰広先生の講演、高野光世さんの出席があり（司会は私）、素晴らしいシンポジウムとなりました。

（相田 明）

静岡県松崎町
昔ながらの米づくりプロジェクト

新米を食べる会を開催！

2013年11月24日に、「新米を食べる会」を開催しました。前回10名位で行ったこの会ですが、今回はなんと子供たちを加えると27名もの参加者があり、準備をするスタッフはてんやわんや。収穫したての新米を楽しむために石部の伝統料理「ごじる」や西伊豆特産の本枯節のかつお節、差し入れの生椎茸やきびなご、さつま揚げの炭火焼きなどたくさんの料理が並びました。デザートの桜葉風味のところてんも大好評！富士山が見事に見える絶好の天気の中、ヒコバエが美しい石部棚田を眺めながら楽しい時間を過ごしました。2年目のお米つくり体験もこれで無事終了。今年も3年目の準備に入っています。3月初旬の「畦切り」体験をお楽しみに！

（高桑 智雄）

「里舞」は、振付の長村順子が千葉県鴨川市の棚田、
大山千枚田の保存活動をする中から生まれた踊りです。
大山千枚田は、先人たちが、山間(やまあい)の土地を、
長い年月をかけて切り拓いたものです。
その場所で踊りを構想するということは、
棚田をかたち造った先人たちの声や、
自生する植物、間近に生きる動物たちの気配に
耳を傾ける作業にほかなりません。
作品に出てくるのは人間だけではなく、
動物も、稲や海、風や時間までも……
つまり「森羅万象(しんらばんしょう)」を表現したいと創りました。
踊り手のほとんどは、鴨川で生まれた子どもたちと、
そこで暮らし、子育てをしてきた女性たちです。
踊りというものが古くから生活と共にあり、歓びや悲しみ、
大いなる存在への畏敬を表してきたことを考えると、
「里舞」に最も似合う踊り手かもしれません。
「里舞」を通じて、私たち日本人が、
自然と共に生きた民であるということを思い出すきっかけになれば
こんなに幸せなことはありません。

チケット料金(税込) 前売 3,000円　当日 3,500円(全席自由)

お問い合わせ NPO法人鴨川現代バレエ団
04-7098-1118　http://sato-mai.com

〈主催〉「里舞」東京公演実行委員会　〈共催〉 NPO法人鴨川現代バレエ団
〈後援〉 千葉県、千葉県教育委員会、鴨川市、鴨川市教育委員会、
大塚実(株式会社大塚商会名誉会長)、棚田学会、
NPO法人棚田ネットワーク、NPO法人千葉自然学校、
NPO法人大山千枚田保存会

棚田の応援団 わたしたちと〝棚田の応援団〟やりませんか!

棚田ネットワークは「棚田の保全に協力したい!」という会員によって自主的に運営されているNPOです。消えゆく美しい"棚田"をどのように保全していくことができるのでしょう? 一緒に考えませんか? ぜひ、私たちと棚田の応援団になりましょう!

会員になると!
会報誌「棚田に吹く風」(年4回)やイベント案内お届けの他、棚田ネットワークが主催する各プロジェクト(イベント)への参加や、スタッフとしての活動もできます。

年会費
○個人会員
維持会員　1口1万円(1口以上)
一般会員　4,000円
応援会員　3,000円
学生会員　2,000円

法人会員を募集しています!

私たちの活動にご支援・ご協力をいただける、企業、団体、事業主さまを募集しています。詳細はお問い合わせください。

年会費
○法人会員
1口3万円(1口以上)

この上のスペース(ページ上1/2サイズ)は法人会員さまのPRスペースとして広告や広報にご利用いただけます。(詳細はお問い合わせください)

編集部から

今号の特集企画で青柳健二さんのインタビューを録るために、新年7日に御殿場の富士山の見える棚田に行ってきました。朝11時に新宿に集合した時点で、天気は見事な快晴!これは美しい富士山が撮れるとメンバー全員意気込んでいたのですが、高速を車で移動中、空はどんよりとした雲でみるみる埋め尽くされました。撮影日は今日一日だけ、車内は不安とあせり、そして言い訳の文章まで考えながら諦め気分で御殿場インターを降りると、なんと富士山周辺だけポッカリと雲が晴れていました! コノハナサクヤヒメが鎮座する富士山。思わせぶりなお姫様だからこそ、富士山は美しいのかもしれません。

新春入会キャンペーン

追加特典がもらえる

通常特典「棚田の絵はがき」
＋プラス!
以下の2つより お好きな特典を選べます!

石部棚田の体験米(3合)

平成26年版『旧暦棚田ごよみ』

ぜひ、この機会に棚田ネットワークの会員になってみませんか!

棚田に吹く風
2014年 冬号 Vol.91

発行 NPO法人 棚田ネットワーク
〒160-0023
東京都新宿区西新宿 7-18-16 トーシンハイム 704 号
Tel / Fax 03-5386-4001
e-mail：info@tanada.or.jp　URL：www.tanada.or.jp
郵便振替口座：00100-7-151565

［今月の表紙］富士山を背後に、川がぐるりと回り込む棚田。なんだか要塞のようにも見えます。(静岡県小山町竹之下吉ヶ島)